

オーストリア資本理論の系譜 ～独自性と多様性～

赤塚一範

國學院大學大学院 経済学研究科 博士課程後期在籍 akatuka.k@hotmail.co.jp

1. オーストリア学派経済学にとって、「資本理論」は、経済現象を分析するための基礎である。例えば、Horwitz (2000)は、「オーストリア資本理論とその含意を理解することで、オーストリアアプローチの独自性に関する詳細な把握を提供する」と述べている。しかしながら、オーストリア資本理論の多様性のため、それが持つ意義は十分に説明されていない。本報告では、オーストリア資本理論を「独自性」と「多様性」の観点から整理し、オーストリア学派に属する学者たちが、資本主義社会に関して共通のビジョンを持ちつつも、そのビジョンのために、多様な資本理論を得るに至ったこと説明する。そして、オーストリア学派経済学を正確に理解するためには、それら多様な理論の理解が不可欠であることを示す。

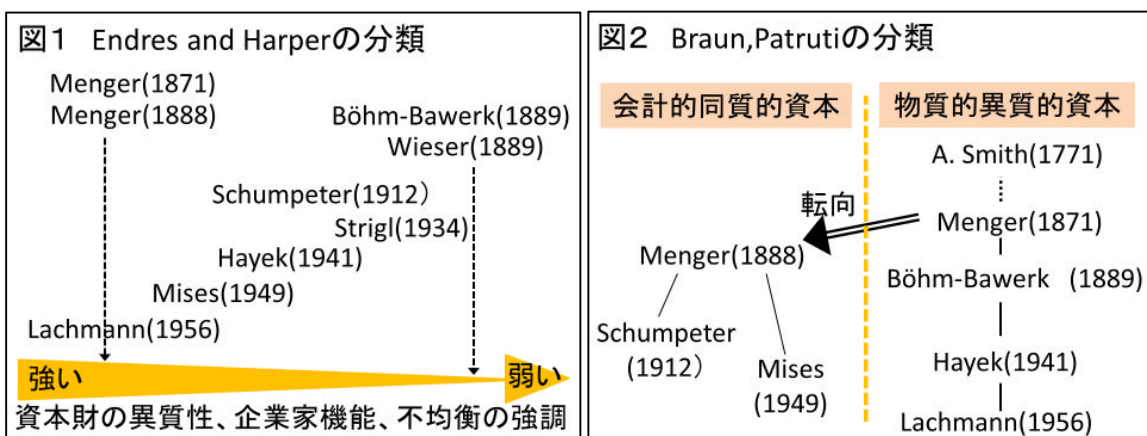
本報告では、第2節で、資本を正面から取り扱うという態度はオーストリア学派の伝統であるが、オーストリア資本理論には幾つかの異なった理論が存在すること、第3節で、理論の多様性の中にも、資本主義社会を分析する際、①資本概念、②企業家的視点、③生産・市場プロセスの3点を重視するという共通項があり、特にプロセスの重視が多様性の要因となったことを説明する。

2-1. オーストリア資本理論は、学派創設者のカール・メンガー(Menger(1871)(1888))以来、第2世代のオイゲン・ベーム＝バヴェルク(Böhm-Bawerk(1889)), フレデリック・ヴィーザー(Wieser(1889)), 第3世代のジョセフ・シュンペーター(Schumpeter(1912)), ルードウィヒ・フォン・ミーゼス(Mises(1949)), リヒャルト・シュトリグル(Strigl(1934)), そしてそれに続く、フリードリヒ・ハイエク(Hayek (1941)), ルードウィヒ・ラックマン(Lachmann(1956))らによって形成された。現代では、マーク・スカウソン(Skousen(1990)), ピーター・ルーイン(Lewin (1999)), ロジャー・ギャリソン(Garrison(2001))らによって引き継がれている。しかしながら、その進歩は直線的なものではない。あるときは分岐し、あるときは合流するなど複雑な様相を呈している。このようなオーストリア資本理論の多様性を指摘する研究は多くあるが、ここでは、Endres and Harper(2011) (以下E&H)とBraun(2014)の分類を中心に議論を進める。なぜなら、近年オーストリア資本理論の系譜をめぐって行われた彼らの説明および論争が、オーストリア資本理論の多様性を簡潔に示しているからだ。

2-2. E&Hは、メンガーの資本理論の特徴を『国民経済学原理』(Menger(1871))で示された「資本財の異質性」と「資本構造」に求め、それらはオーストリア学派によって程度の差こそあれ大切に引き継がれてきた伝統であるとした。図1は、E&Hによるオーストリア資本理論の分類を簡略化し図示したものである。E&Hは、いくつかの項目で資本理

論を分類したが、その中でも特に重要な項目は、資本財の異質性、企業家機能、不均衡状態の仮定である。これらは、強い関係性を持っており、不均衡状態において、資本財の異質性と企業家機能は重視される。これらを強調したのがメンガーとラックマンだ。資本財の異質性は財の物理的な要素からではなく、企業家が事業計画の中で財に機能を付与することで生じる。しかしながら、現実の世界において、諸計画はすべて実行可能とはならない。市場プロセスを通じて、企業家が費用と収益を比較し自らの事業計画を修正していく中で、すべての計画が調整され実行可能となる均衡状態へと近づいていく。他方、調整の終わった均衡状態を扱ったのがベームとヴィーザーである。例えば、ベームは、資本財の異質性を認めてはいたが、「平均生産期間」を導入し、資本蓄積を「時間」という単一の尺度で示した。これは、均衡状態を仮定することでしかなし得ないが、ここでは資本財の異質性や企業家機能は問題とならない。以上のように E&H は、オーストリア資本理論を、大きくメンガー・ラックマンと、ベーム＝バヴェルク・ヴィーザーの流れに分類した。

2-3. この論文に対して、Braun (2014)は、メンガー・ラックマンと一括りに扱うことに反対し、メンガーの資本理論の特徴は、Menger(1871)で示された資本財の「異質性」や「構造」にあるのではなく、Menger(1888)で主張されたビジネスなど現実世界にある、会計に基づく同質的資本概念にあると主張した。この概念は、シュンペーターやミーゼスに引き継がれていく。これと似た見解として、Patruti(2013)のように、資本を資本財の蓄積とするアダム・スミスに代表される物理的視点と、資本を貨幣の合計や基金として見るメンガーに代表される主観的視点に分けるものもある。この見解は、上記のブラウンとほぼ等しいだろう。図2は Braun (2014)と Patruti(2013)による分類を示したものである。



3-1. このようにオーストリア資本理論は、上記の分類のどちらにおいてもその多様性を見ることができる。本報告の目的は、どの分類が正しいかと主張することではなく、それら多様な資本理論をどう位置付けるかである。そのためには、まず、多様な理論を包含する共通項、独自性を見つけることが重要である。それは、①資本概念を正面から取り扱うということ、②企業家的視点を意識していること、③生産と市場をプロセスで捉える

ことである。この観点から、多様な資本理論を体系的に位置づける。

3-2. 資本理論にとって、主観主義とは、企業家的視点を意味する。なぜならば、資本は、企業家が事業を行う際に生じる概念であるからだ。他方で、プロセスとは、第一に企業家の事業計画の策定、資金収集、資本構造の構築、事業評価、事業計画の修正、資本構造の改変といった生産プロセスを、第二に企業同士の関係を調整する市場プロセスを意味する。

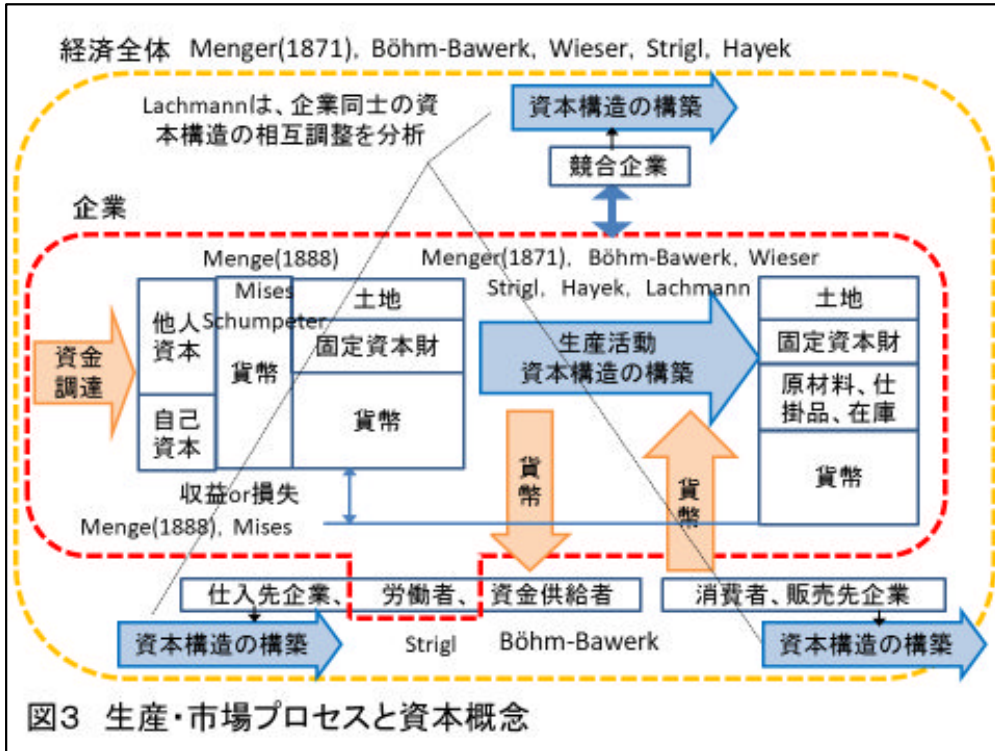


図3は、企業家的視点に基づいた生産・市場プロセスを表わした図にそれぞれの資本概念を位置づけたものである。内側の点線は、一つの企業体内部の生産プロセスを示し、時間は左から右へと進行する。外側の点線は、経済全体を示している。事業を始めるに当たり企業家は、資金を集める。Menger(1888)、シュンペーター、ミーゼスにとって、この資金が資本となる。次に、企業家は、資金を用いて、土地、建物など固定資本財、原材料など流動資本財を購入し、労働者を雇用し、生産を行う。しかしながら、生産は単にそれらの要素が存在するだけでは行われぬ。それらは適切に組み合わせられなければならない。Menger(1871)は「高次経済財の諸数量」、ベームは「中間生産物の総体」、ヴィーザーは「朽ちやすく、動かすことのできる生産手段」、ハイエクは「所得を一定に維持するための非永久的資源の総体」、ラックマンは「物的資材の(異質成分からなる)蓄積」とそれぞれ資本を定義したが、これらは単なる資本財の集合体ではない。例えば、メンガーは多段階の生産プロセスを、ベームは同心円を用いて資本構造を例示したが、これは異質な資本財が適切に組み合わせられ構造体を形成していることを意味する。この中でもラックマンは、企業家による資本構造の構築を詳細に説明した。図では、これらの資本概念は、企業の生産

活動に位置づけられる。シュトリグルは、ベームの迂回生産理論を採用し生産の間、労働者の生活を支える消費財（生存基金）が資本であるとした。この図では、企業家が支払う賃金の部分に相当する。さらに、Menger(1888)、ミーゼスにとって、資本とは、資本財の貨幣価値の合計であり、経済計算の基礎である。企業家は自らの事業が収益的かどうかを多様な資本財を貨幣価値で表わすことで評価し判断する。ブラウンは、物理的資本と会計的資本を分けて考えたが、事業を行う企業家にとって両者は不可分である。そのような分離は、生産をプロセスで見えていないがために生じる。このように、オーストリア資本理論は、資金収集、資本構造の構築、事業評価、という一連のプロセスの中にそれぞれ位置づけることができる。

3-3. では、このような共通のビジョンからなぜ多様な理論が生まれたかの。それは、オーストリア学派は経済を上記で示したようなプロセスと捉えるが、そのプロセスの中での強調点や目的意識の違いが資本理論に差を生み出したからだ。例えば、ベームは、利子を説明するため、資本財の異質性を認識しつつも、「平均生産期間」という概念を採用し均衡状態を仮定した。ミーゼスも、資本財の異質性と資本構造をはっきりと認識していた。けれども、彼の第一の目的は、資本主義社会の基盤として、事業の評価を可能にする会計システムの重要性を訴えることであった。シュンペーターは、新結合の遂行による経済発展論を構築したが、これは資本財の異質性と資本構造の存在を前提としている。しかしながら、静態的均衡を打ち破る企業家機能とそれを支える銀行機能を強調するため、資本を「財貨の調達手段」である資金とした。ハイエクは、資本財の異質性を強調し資本構造の変化のプロセスを説明しようとしたが、それは景気循環論の基礎を構築するためだった。そのため企業家的機能ではなく、一般均衡へのプロセスを詳細に説明したマクロ的な資本理論となった。同様に、シュトリグルも、景気循環を説明するために資本理論を構築した。彼は、特に消費財価格と利子率の関係を描写するため、資本財の異質性や構造を描写しているにも拘わらず、それらを単純化する平均生産期間を採用し、消費財からなる生存基金を資本概念とした。ラックマンは、ハイエクが構築した資本理論からさらに企業家的視点を推し進めた。その結果、ラックマンは、ハイエクと同様に社会全体に渡る資本構造の理論を構築しようとしたが、企業家論的な資本理論を作り上げることとなった。

4. このように、オーストリア学派は、資本概念を大切にし、経済現象を企業家的視点とプロセスの観点から分析するという共通点があるにも拘わらず、各々が重視することが異なったため、その資本理論は多様なものとなった。しかしながら、この多様性は、必ずしもネガティブに捉えるべきものではない。なぜならば、それぞれが資本主義社会の重要な側面を捉えており、資本主義社会を正確に理解するためには、それぞれの資本理論の理解が不可欠なのである。もしも、多様性がネガティブとなるのであれば、その多様な理論の関係性が不明瞭だからである。本報告では、多様なオーストリア資本理論を、一つの図

によって体系的に説明したが、これは、オーストリア学派のビジョンを理解する上で、欠かすことのできない視点を提供するだろう。

参考文献

Böhm-Bawerk, E. [1884](1890) *Capital and Interest*, Translated by W. Smart, London: Macmillan.

Böhm-Bawerk, E. [1889](1930) *Positive Theory of Capital*, Translated by W. Smart, New York: G. E. Stechert.

Braun E. (2014) “The Menger-Lachmann Trajectory on Capital: A Comment on Endres and Harper,” *Journal of the History of Economic Thought*, Vol.36, No.1.

Endres, A.M. and Harper, D. A. (2011) “Carl Menger and his followers in the Austrian tradition on the nature of capital and its structure,” *Journal of the History of Economic Thought*, Vol.33.

Hayek, F. A. (1941) *The Pure Theory of Capital*, London: Macmillan.

Horwitz, S. (2000) *Microfoundations and Macroeconomics*, London: Routledge.

Lachmann, L. [1956](1978) *Capital and its Structure*, California: Institute for Humane Studies.

Lewin, P. (1999) *Capital in Disequilibrium*, London: Routledge.

Menger, C. (1871) *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Vienna: Wilhelm Braumüller.

Menger, C. (1888) “Zur Theorie des Kapitals,” *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Vol.17.

Mises, L.V. (1949) *Human Action: A Treatise on Economics*, London: Hodge.

Patruti, A. (2013) “The Two Conflicting Approaches to the Concept of Capital within Economic Thought,” *Economic Insights*, Vol. II, No.4.

Garrison, R. (2001) *Time and Money*, London: Routledge.

Schumpeter, J. A. [1912](1936) *The Theory of Economic Development*, Translated by R. Opie, Cambridge: Harvard University Press.

Strigl, R. [1934](2000) *Capital & Production*, Translated by M. R. Hoppe and H.-H. Hoppe, Edited by J. G. Hülsmann, Alabama: Mises Institute.

Skousen, M. (1990) *The Structure of Production*, New York: New York University Press.

Wiser, F. [1889](1893) *Natural Value*, Edited by W. Smart, London: Macmillan.

赤塚一範 (2017) 「資本、生産、および景気循環 R.シュトリグル『資本と生産』に関する一考察」『國學院大學経済学研究』第48輯。

赤塚一範 (2018) 「資本の異質性と資本構造オーストリア資本理論の一考察」『國學院大學経済学研究』第49輯。